

学校からの帰り道。広い公園をつつきる道にはだれもない。チエが転校してきたのは小三の春。もう秋になっていくのに帰り道はひとりのままだった。

はじめて新しい教室に入った日、先生はごっつい岩みたいに大きく見えたし、生徒たちはギザギザの小石みたいにがって思えた。どっちもちかづくのがこわかった。

だから休みじかんになって、きょうみしんに集まってきたみんなのしつもんにもちゃんと答えられなかった。

するとみんなは少しずつ離れていき、何日かするとだれもいなくなり、チエのいる机は海にかぶ小島みたいにぽつんとしてしまった。

海の小島からのがれなければいけないと、決死のかくごでクラスにとびこんでみた。けれどうまく泳げず、おぼれ



そうになったところをひっぱりあげてくれたのが麗奈ちゃんだった。だからチエは麗奈ちゃんたちのグループから離れないようにしていた。トイレも休み時間もいつもいっしょで、麗奈ちゃんたちの話にはすべてうなずき、歩く時は麗奈ちゃんのうしろについて歩いた。

でもこのごろ、なぜかひとりになりたいと思う時がある。麗奈ちゃんには何でもくらべたがるくせがあつて、だれが一番などとすぐにきめたがる。一番かわいいのはだれ？ 一番おもしろいのはだれ？ そんなところにチエはちよつとくたびれてしまったのだ。

なので、ひとりの帰り道はつまらないけれどほっとするひとりって、ほっとするのかつまらないのか、どっちなんだ？ わからなくなって目の前の小石をけつとばした。